原田牧場 Note

page 14

　密かなる昇級試験がありました。牧場長も両親も出かける用事があり、私ひとりが留守番でした。もうすぐ産みそうな雰囲気の初産牛が1頭いるよ、見ててねーすぐ帰るから。と言われていたので、2時間おきに牛舎を見回って様子を見ていました。寝たり起きたりソワソワしだしたのですが、ちょこっと水風船みたいなもの（子牛が包まれている羊膜）が出てるくらいなのでまだ大丈夫、難産（逆子や子宮捻転）でない限りは無理に引っ張ったりはしないこと、勉強会で学んだ言葉が浮かびます。A「でも、初産牛だよ、早めの介助がいるんじゃない？」O「いや、そのうち誰か帰ってくるよ、それまで見守ればいいんじゃない？」知識を中心に AとOがそれぞれの見解を話し出します。（私の母がA型、父が0型だったので、それぞれの特性を持つふたり）　横たわり息も荒くウンウンいって30分以上待ちましたが自力で出てくる感じなし。初産なので出口が狭く詰まってる感じもします。破水したら、その後は時間かけちゃダメって牧場の母さんが言ってたよなあ。A「ひとりでやるんだから破れてから準備しても遅いよ、もうやろう」O「やる前に用具を揃えてもうちょっと待とう」牛に、もくし（牛を引く際の手綱）をつけて、生まれた子牛を運ぶ二輪車を持ってきました。前足二本の爪先とだらんと出した舌が膜ごしに透けて見えます。子牛の向きは正常、水風船がしぼんだようになったので、ぬるぬるの爪先になんとかロープを巻いて、舌は巻き込まないように気をつけながら、牛がいきむのに合わせてゆっくり引っ張ります。A「ロープゆるめじゃない？すっぽ抜けるよ」O「大丈夫だよ、ゆるめの方が子牛に負担がかからないよ」結構キツイな、誰か居れば出口を開いて子牛の顔が出やすくしてもらえるんだけど。子牛が大きい可能性があるなあ。

軽い力で引っ張れる滑車のついたロープがあるけど、みんな不在でどこにしまってあるのか？探す時間もなく、自力で、気温30℃の中、格闘すること1時間、牛も私も息絶え絶えになりながら、子牛も頑張ってくれ、引っ張り出しに成功しました。子牛がつっかえたまま放っていたら、親もだめにするところでした。子牛はちょっと水を飲んでいたので、下向きにし、顔の膜やヌメヌメを拭いて、目に力があるかチェック。古典的なやり方としては藁を鼻に入れて刺激し、くしゃみをさせて呼吸を促すなんて方法もあります。本当は親牛に子牛の身体を舐めさせるリッキングをすると、子牛へのリラックス効果や生まれたての体の機能が目覚めるのですが、親牛ぐったり…。暑さで私も熱中症になりそうだったので、先へ急ぎます。子牛が立ち上がる前に運搬二輪車に乗せます。ぬるぬるのだらんとした50キロ以上もある子牛をひとりで乗せるのも力がいりますが、炎天下、それを押して500m先の子牛ハウスへ連れて行くのに息が切れ…。休憩がてら途中の水場で子牛をキレイに洗ってクールダウンしようとしても心臓のバクバクが止まらず、どうしようかなあ。座り込んで途方に暮れるとはまさにこのこと。なんて考えていると、AとO共に「子牛はここに置いて一旦家で涼もうよ、水分取らないとやばいよ」でもなあ、無抵抗な子牛はカラスやキツネに傷つけられることがあるからなあ、ほって置けないし。もうすぐ立ち上がりそうだしさあ。くりくり目の子牛の顔を見てたら、力をふりしぼって今やるしかない！二輪車は心臓に悪いから諦めてショベルにしよう。ショベル端がカッターのように切れるから子牛になんかあったら、と思うとイヤだったんだけど。さっきより動きが良くなってきてる子牛をなだめながらよっこいよっこいとショベルつきトラクターに乗せかえ、ハウスまで無事運びました。牛を引っ張った際に尻餅ついてべちゃべちゃだし、汗ダラダラで最悪の状況だけど、目の前の命を守る使命だけに突き動かされて、最高の仕事をしたんじゃないだろうか。誰も頼る人がいなかったけど、これまで得た知識と自分の中での考察＝AとOのあれこれの調整がうまくいった。

今日の一連の作業すべて、私がやるのは初めてでした。普段牧場には私より経験のある誰かがいて、作業をするのは見てはいたけど、それを思い出してひとりでここまでやれたのは驚きでした。ここら辺で自分の実力試してみなよ！って牛が体を張って私に昇級試験をさせてくれたんだなと思います。

夕方近くになって牧場の両親が帰ってきました。そんな大変なことになったとはつゆ知らず。誰にも知られず、褒められずでも、母子ともに元気な様子を見ていたら、それだけで良かった！ 酪農家としてワンランク昇格。自信をつけさせてくれてありがとうね、牛さん。

牧場長（夫）は帯広の展示会へ遊びにいって、仕事もせず夜遅く帰ってきたのだし、もう少し私の働きを褒めてくれても良かった気がします。
子牛はオスで我が家に残ることはできず、キロ売りの市場に出たのですが、

私「生ませるのに苦労したし、大きかったでしょ。何キロだったの？」
夫「普通のサイズだったよ」…と 一番面白くない返しをして
　私にため息をつかれました。
A「本当のことしか言わない（嘘をつかない）ところが
　彼のいいところじゃない」
O「希ちゃんが無事生ませた分、いい値段つけてくれたよ！って言えば
　もっと仕事はりきるのにね！嘘じゃない言い方でさ」
AとOにはホント助けられます。彼の昇級試験はまだまだ続きそうです。

筆者　　原田　希
1973年　大阪府吹田市生まれ
2006年　酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ
2017年　北海道農業士に認定
　　北海道指導農業士の夫ともに新規就農者の支援や女性農業者向けの
　　勉強会のお世話係を担当